協力／キングレコード・C.A.L

Kyoto Hollywood News 京都ハリウッド通信

由美かおるという伝説 遂に出るべくして出た 水戸黄門傑作選「由美かおるスペシャル」

B83W59H86、53歳にしてこの完璧なプロポーション！しかもこのサイズを15歳の頃からキープしているという驚愕の事実！由美かおるは既に「存在そのもの」が伝説である。由美かおるは私生活もミステリアスだ。噂では、京都市生まれの由美かおるは現在も京都に在住しているらしく、太秦の東映京都撮影所付近で買い物をしていたという目撃談も聞かれる。由美かおると言えば「水戸黄門」で毎回入浴している年齢不詳の女優さん」と思っている読者も多い事だろうが、彼女は「お風呂に入っているだけの人」ではない。彼女のデビューは'66年、中学三年生の時。深夜番組のカバーガールとしてデビューした由美かおるは、先記した抜群のプロポーションで人気爆発。以来、セクシー一筋37年。これだけの年月をブランクもなく、美のカリスマとして君臨し続けるという事は、毎年300人がデビューするグラビア・アイドルのほとんどが消え去っているという現実を見るまでもなく、並大抵の事ではない。由美かおるが「水戸黄門」に「かげろうお銀」としてレギュラー入りしたのは'86年。それから18年たった現在も由美かおるは8時30分前後に入浴し続けている。ただの小娘が入浴したとて、これ程の期間視聴者に支持される番組名物とはなり得ない。かの入浴シーンこそは、由美かおるがセクシー女優として培ったノウハウの集大成といえる「至芸」なのだ。

DVD「水戸黄門傑作選・由美かおるスペシャル」（税込3780円）好評発売中。お銀としてレギュラー入りする以前のゲスト出演3作、インタビュー、レギュラー後の特選入浴場面を収録。問い合わせはTEL.0120-315-347まで

妖怪日記 夜食

古から伝えられる妖怪たちの、平凡かつ赤裸々な日々。

からかさ

1本足でひとつ目の日本有数のメジャーな妖怪。自由奔放で無節操な性格。

哀愁坊主

内気でお人好し、ひたすら忍耐強く打たれ強い性格。寂しい時はポエムを唱む。

トリビア時代劇「斬り抜ける」でヘェ～！

人斬りについてのトリビアを一つ。時代劇で悪人どもを次々と斬り伏せる場面、あれは実際には無理。斬った際に刀に付着する脂で斬れなくなり、二、三人を斬るのが精々とか。実はこれ、テレビ時代劇「斬り抜ける」で語られるトリビアの一つ。「斬り抜ける」は徹底したリアリティ指向で、毎回様々なトリビアを聞かせてくれる。例えば刀は、余程の名刀を除いてナマクラが多く、立ち合いをするとすぐに折れたという。そのため「斬り抜ける」では大勢を相手にする時、決闘場所の草原のここあそこに予備の刀を用意、折れるたびに予備の刀を取りに走るという場面が描かれる。時代劇ファンならずとも「ヘェ～」を連発してしまう実に素敵なドラマなのだ。

「斬り抜ける」'74年、朝日放送にて全20話を放映。出演・近藤正臣、和泉雅子、岸田森、佐藤慶。キングレコードよりDVD発売中。4179円(税込)

究極のリサーチの結晶 水戸黄門

時代劇ってマンネリでワンパターンだよなぁ、と言われる場合、多くは「水戸黄門」を指している。時代劇の代表となっている「水戸黄門」、確かにワンパターンではあるが、イコールつまらないというのは間違い。何故ならつまらない番組がこれ程の人気を得て、国民的な長寿番組になるはずがないのだ。水戸黄門のワンパターンは放送当初より電通による徹底したリサーチに基づき、計算されつくした末に築き上げられたものなのだ。そういう眼で見れば、これまでマンネリとバカにしていた「水戸黄門」の素晴らしさが見えてくる。分かりにくければ料理に例えてみよう。究極のラーメンを開発して開店、行列の出来るラーメン屋になったとして、毎回味が違ったらどうなるだろう？いつものラーメンと違うと、客が不満を抱き離れるのは間違いない。客が求めるのはいつものラーメンであり、同じ理屈で「水戸黄門」はいつも「水戸黄門」でなければならないのだ。「水戸黄門」のもう一つの人気の秘密に、お年寄りの視聴者に対する細やかな配慮がある。お年寄りはトイレが近い。よって番組中にトイレに中座する事もしばしば。それでも話が分かるようにと「水戸黄門」は脚本作りに配慮しているのだ。そんなある日プロデューサーに投書が届いた。それは「水戸黄門」を前後編で放映した翌週の事。投書したお年寄りは「自分は老い先短く、いつお迎えが来ても おかしくない身。もし前編を見て、後編を見る前にお迎えが来たら死んでも死に切れません」と憂いを切々と綴っていた。以来「水戸黄門」では前後編を止め、完全な一話完結形式となった。

「水戸黄門傑作選」好評発売中。問い合わせは上記の由美かおるスペシャルを参照。

今月の言葉

責任編集人
山田誠二

1963年生まれ。京都を拠点に、映画のプロデュース、脚本、評論の他、コミック原作など多方面で活躍の作家。映画関連著作多数執筆。

6月末はメディアファクトリーより創刊された怪談専門誌・幽の創刊イベントに出演のため東京に。イベントは京極夏彦、東雅夫、木原浩勝、中山市郎、唐沢俊一さん他という豪華な面々が出演。300人の観客を集めて盛況。幽は怪談を実話、小説、コミック、映画など、あらゆる方面から検証する素晴らしい一冊。是非ご一読下さい。

２００４年８月１日　山田誠二